

## 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

### 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	岡崎市立常磐東小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	清流学習を通じ、よりよい地域を創造する児童の育成

〈活動・研究の意義および活動報告〉

#### 1. 実施計画に至るまでの経緯

本校は愛知県岡崎市の北東部、米河内町を走る県道 477 号線を見下ろす小高い丘の上にある。恵まれた自然環境の中、47名の全校児童が、学年の枠を超えて楽しく学校生活を送っている。

本校の南を流れる青木川は、昔から流域の人々の生活を支えてきた、地域住民にとってなくてはならない川である。生活用水としての活用だけでなく、昭和期には「ガラ紡」の動力源である大型水車を回す働きを担い、岡崎市の繊維産業を支えたこともある。

そんな青木川であるが、20年ほど前に学校前の川原が地域住民の手で「せせらぎの広場」として整備されたことにより、この地域にとって憩いの場所としての一面も併せもつようになった。春は百匹ほどの鯉のぼりがさわやかな風に泳ぎ、夏には涼を求めて多くの人が足を運ぶ、地域の財産であると言える。この川をもっと美しく、自然豊かなものにしようと、昨年度より青木川に関わる学習を「清流学習」と名付け、学習を通じて地域をよりよいものにしようとする児童の育成を図ろうと考えた。

#### 2. 活動・研究の目的（ねらい）

- ・青木川を舞台に行われるさまざまな活動を通じ、郷土愛を育む。
- ・生き物や水質についての調査、清掃などの活動を通じて青木川の現状を正しく把握し、自分にできることを考え、実践する。
- ・学びを通じて知ることのできた自然の素晴らしさを自分の言葉で周囲に発信する。

#### 3. 活動時期と活動内容

##### (1) 4・5月

学習のきっかけとして、4月11日に、6年生児童が青木川の実情を把握するための清掃活動を行った。また、20日には岡崎市漁業協同組合の協力により、全校児童が参加してアユの稚魚放流体験を実施した。1年生児童にとっては、本校の正門前の青木川に作られた「せせらぎの広場」で行う、最初の活動であったことから、川に降りる際には緊張する様子が見られたものの、活動が始まると楽しそうな表情を浮かべ、アユが無事に戻ってくことを願って放流することができた。



アユの稚魚を放流する児童

5月上旬には2・3年生が生き物調査を行った。川にすむ生き物を採取し、購入した書籍やタブレットを活用してその特徴や生態について主体的に調べ学習を進めた。同様に6年生児童はパケットを活用した水質調査を行い、その結果から年間の活動方針を決定する話し合いを行った。

##### (2) 6・7月

6月には3・4年生が水を汚さないための工夫や汚水の処理について学び、きれいな水を作るための工夫を知ること为目标に、浄水場見学に出かけた。ここから、飲み水を作るための苦勞を知るとともに青木川をきれいに保つことの大切さに気付くことができた。

また、6年生は5月から継続的に行ってきた水質調査の結果についてのまとめを行った。すると、朝と昼で水質に違いがあることが分かった。ここから子供たちは、出勤や登校などの外出により家庭で過ごす人数が減る昼間は生活排水の量が減ることで水質の変化（向上）がみられるのではないかと考え、早朝の水質調査を提案するなど、学びの深まりが感じられるようになった。

7月14日には、昨年度に引き続き全校校外学習として木曾三川公園内のアクアワールド水郷パークセンターに**借り上げバス**を利用して出かけ、環境教育プログラム「川を汚したのはだれだ」を体験した。そこから、自分たちが出している生活排水も水質の悪化につながっていることを知り、自分たちにできることを考えて、実践していこうという思いを抱くようになった。



実験から水の汚れる過程を学ぶ



展示から水生生物の生態を学ぶ

(3) 8・9月

夏休み明けの8月31日には、「青木川クリーンデー」と題し、6年生が全校児童に向け、これまでの清流学習の経過や成果についての発表をした。その後、全校児童で青木川や校内ビオトープ「ギョギョランド」の清掃や児童の企画による「川遊び体験」を行った。これをきっかけに、9月は調査活動が活発に進められた。3年生が第2回となる生き物調査を実施し、5月の調査結果との比較をした。さらに2年前に実施した生き物調査との比較をしたところ、青木川にすむ生き物が種類の面でも数の面でも少なくなっているかもしれないという疑念を抱くことにつながった。そこで、魚が隠れていそうな場所に罾を仕掛け、本当に魚はいなくなってしまったのかを検証する活動が始められることとなった。

(5) 10・11・12月

11月には、4年生が青木川のごみについての調査を始めた。落ちているごみの量や種類から、これらのごみがどのようにして学校前の青木川に集まってきているのかについて考え始めた。

また、人間環境大学の森岡教授を**講師としてお招き**し、青木川に生息する生き物の生態、そして水質についてお話をいただいた。授業後にそれぞれの抱いた疑問をもって質問をする様子や講師の採集した生き物の様子をじっと覗き込む姿から、関心の高まりを十分に感じることができた。



青木川での全校環境学習



授業後に講師に質問する3年生児童

(6) 1・2月

1月下旬に実施した授業参観および校内発表会では、3～6年生が1年間の「清流学習」についての成果を、保護者と他学年の児童に向けて発表した。3年生は青木川の生き物、4年生は青木川のごみ、5年生は放流したアユが遡上してこない理由、6年生は3年間の学びについて発信した。



作成したごみマップを基に発表



他学年児童や保護者に向けて発信

また、2月には環境教育を同様に推進している竜谷小学校に出向き、生平小学校を加えた3校での交流会を実施した。環境教育と言っても、切り口や該当学年の違う中での発表に、子供たちはとてもよい刺激を受けることができた。対象となる河川こそ違うものの、いずれも三河湾に流れ込むという共通点をもつ3つの川の環境学習を通じた交流は今後も継続させていきたいと考えている。

4. 子供たちへの効果

本実践を通して、子供たちは青木川に対する関心を強めている。その関心は川の流れに、川原を彩る花々に、そして川辺に生きる虫をついばむ鳥たちへとどんどん広がりを見せている。こうした多くの切り口から子供たちが川を見つめ、青木川をいつまでも豊かに保とうという思いを抱くことにより、いずれその目は地域全体に向けられるのではないかと考えている。地域を誇りに思い、大切にしようとする気持ちをもった子供たちを育てていきたい。

また、論理的な思考をする児童が増加してきた。5年生の実践では、矢作川河口付近でアユの稚魚が確認されている事実を踏まえ、アユが青木川に遡上していない理由を、遡上途中に「カワウなどの鳥に食べられた」「釣り人によって釣り上げられた」「堰によって行く手を妨げられた」と考えるなど、追究に深まりが感じられる場面が増えている。これからも実践を継続していく中で、多面的、論理的に自然事象を捉え、深く考える児童を育成していきたい。